



蛍の飛ばない国にて

ラトヴィア・リーガ市在住

黒澤 歩

俳句の人氣

学年度が新たまる9月、毎年国内各地で開催されるポエム・デーで秋の文化シーズンも幕開けとなります。「詩は心のパン」というほどに、詩というものが大切にされているお国柄です。昨年、大学の職場で忙しくしていると、「図書館で日本の俳人による講座があるよ！」との声に呼び出されました。慌てて行ってみると、夏石番矢さんが座っておられました。そして、地元の著名な詩人レオン・ブリエディス氏がラトヴィア語訳した夏石さんの俳句集の出版会も開かれました。夏石さんがリーガで詠まれた一句は「リーガという長い靴下のなかを歩く」。

同じ9月、地方都市イェルガワにある大学の、ラトヴィア人教員プトニニャ氏による自作の俳句集（タイトルを邦訳すれば「白い蘭」）の出版記念会に招待されました。「高波が岸に投げだす白琥珀」（仮訳）は、いかにもラトヴィアらしい。先の詩人のブリエディス氏も、またその他の文学者もラトヴィア語を試みているほど、俳句は静かな人氣があります。

ラトヴィア語訳

ラトヴィアに俳句が初めて紹介されたのは、1920年代のことでした。文学者のシュヴァーベは英語から俳句の翻訳を試みて当時の雑誌に発表しているし、自作詩集には寺の鐘の音を意識してか、

“Gong, Gong” というタイトルをつけています。大正時代に神戸にてラトヴィア名誉領事を務めたオーゾーリンシュは、俳句と短歌のほか、広く日本文化の紹介に貢献した人物です。

さて、現代においても、俳句は一種のファッションであるかのようです。毎年のように、クリスマスが近づいてくるとプレゼント用にと、シンプルで東洋的な趣の装丁の俳句の小型本が出版されているのです。したたかな俳句ブームを支えているのが、日本語から直訳している翻訳者のグナ・エグリーテさんです。1986年に出版された布ばりのラトヴィア語の俳句集「影・草の影、トンボの影」は、大人気となりたちまち売り切れたそうです。そこでは、俳句の変遷を追う形で、古典から近代までの作品が多数取り上げられています。それは、侘び、寂び、ものの哀れなどの美的感覚の解釈、そして形式的特徴などがしっかりと記述された文献としては、ラトヴィア語で唯一のものだといえます。エグリーテさんによる俳句のラトヴィア語翻訳集の出版は、1995年の児童向け俳句集、そして1997年の「螢火」、さらに続々と続いています。

「君」が「ブツダ」に

私が1993年にラトヴィアにきて以来、なにかにつけては「あなたはどの俳句がお好き？一句詠ん



ラトヴィア語訳
俳句集「影」

同じく
俳句集「螢火」

で」などと言われてこまったものでした。それで、ラトヴィア語訳を通して、私は日本の俳句を読むようになったと言えます。外国人は、俳句に禅仏教の精神をよく見いだして、東洋精神への憧れをまた助長するようです。高浜虚子の句「虹立ちて忽ち君のある如し」は、ラトヴィア語では「虹が出た。そこに仏陀がいることを知っている、仏陀が」となることも、そういうわけでしょうか。

この他にも、原典と翻訳をくらべてみると、自然の背景が異なる国での解釈の違いを考えずにはいられません。芭蕉の「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」がラトヴィア語では「閑かさや岩にねじ入る蟬の響き声」となるのも、あの蟬の声を知らないから、もしくは知ったからこそ、「ねじ入る」ことになったのかもしれませんが。毛虫のように這って飛ぶことのない蛍しか知らないラトヴィア人は、「たましひのたとへば秋の螢かな」（飯田蛇笏）をどう読むことでしょうか。ちなみに、ラトヴィア語では「たましいは存在する。秋の螢の光がその証明だ」となっています。